

グリム、アンデルセン童話の発見 (下)

—日本における近代児童文学の出発点

川戸道昭

新たに見つかった『ローマ字雑誌』掲載のグリム、アンデルセン童話の翻訳について、さまざまな角度から調査を進める中で、わたしは一つ大変重要な発見をした。それは、二つの翻訳のうちアンデルセンの翻訳が、原書からの翻訳ではなくて、当時一般に流布していた英語教科書からの重訳であったということである。しかも、その英語教科書は『ローマ字雑誌』の「王の新しい衣裳」ばかりでなくて、それから一年四カ月後に発表された『女学雑誌』の「不思議の新しい衣裳」の出典ともなっているという事実も同時に判明した。

それら二つの翻訳の原文が掲載されているのは、『ニュー・ナショナル・リーダー』(以下、明治の呼称にならって『ナショナル読本』と表記)という英語教科書で、『第一読本』から『第五読本』までの五巻からなるその英語教科書の五巻目に「皇帝の新しい衣裳」の英訳が掲げられている。なぜそれが『ローマ字雑誌』や『女学雑誌』の翻訳の原文と判断できるかというと、その英訳には、アンデルセンの原文にないさまざまな変更が存在し、その変更部分と二つの翻訳の日本語が一致するためである。

たとえば、いよいよ皇帝の衣裳が出来上がってそれを試着してみようという場面で、原文は、織り手の「いかさま師ども」が皇帝に「新しい着物を、一つ一つお着せするようなふりをしました」(大畑末吉訳『アンデルセン童話集』、岩波文庫)となっているのに対して、『ナショナル第五読本』の方は、「ご覧ください、これがチョッキ (waistcoat) です、これが上着 (coat) です、これが外套 (cloak) です」と、手渡す衣裳の明細が一つ一つ記されている。『ローマ字雑誌』の同じ部分を見ると、「これはチョッキにて候なり。御覧ぜよ！これは上着にて候ぞや。これは御ひきまきに候なり」とあり、それが『ナショナル第五読本』の忠実な翻訳であったことがわかる。日本語訳だけみたのでは、最後の「ひきまき」が何を意味するのかははっきり理解できなかったが、英文と照合することにより、それが「cloak」に当てられた訳語であるということが判然とするという次第である。同じように、『女学雑誌』の翻訳も、「之が下ばきにて候、之が上着にて候、之が長上着にて候」と英訳通りの逐語訳になっていて、同じ英文からの重訳であったことがわかる。これと似たような一致点はほかにも見られるし、『女学雑誌』の「小供のはなし」欄には、これ以外にも『ナショナル読本』に出てくる話が訳載されていることなどから判断して、これらの翻訳が『ナショナル第五読本』をもとにした翻訳であったことはほぼ間違いないように思われるのである。

『ナショナル読本』をはじめとする英語リーダーが、当時の少年・少女にとって欠かすことのできない重要な知識の源泉となっていたことについては、ジャーナリストの長谷川如是閑が大変興味深い証言を残している。英語読本がうまく読みこなせなかったために落第まで経験した如是閑は、当時の英語読本について《本そのものは、日本の読本のように親しみのもたれないものではなかった。主にアンデルセンやグリムなどの古典的の童話で、子供の心に訴えるものがあつた》と述べている。そして実際に、アンデルセンの「マッチ売りの少女」の英訳を読んで、《教場で泣かされた》という貴重な証言まで残している(『ある心の自叙伝』)。如是閑は明治八年の生まれで、《十二歳で中学程度の学校に入った》ということだから、彼が『ナショナル第三読本』に掲載された「マッチ売りの少女」に涙を流したのは明治二十年頃であったと考えられる。当時、子どもが目にするのできた西洋童話といえば、『イソップ物語』など、主に道徳教育の目的から修身の教科書等に掲げられたものがほとんどで、『ナショナル読本』の「マッチ売りの少女」や「皇帝の新しい衣裳」は、文字通り、日本の少年・少女に西洋童話の本質を理解させる最初の機会を提供するものであった。とりわけ、それが明治期きってのベストセラーであった『ナショナル読本』に載っていたということは、その英語教科書を通して西洋童話の真のおもしろさに目覚めた生徒

の数はとても十人や二十程度にはとどまらなかったはずである。

それを通して西洋童話の真価に目覚めたのは単に生徒ばかりではない。われわれは、『ローマ字雑誌』や『女学雑誌』の発行・編集に携わったのがみな当時の英語教育と深い関係にあった人たちであったということを思い起こす必要がある。「マッチ売りの少女」や「皇帝の新衣裳」の話に、子どもの心を突き動かす大きな力が秘められていることを見てとった彼らは、さらに多くの児童生徒を西洋童話の世界へと誘うために、自分たちの編集する雑誌にその翻訳を掲載していった。日本の近代児童文学は、彼らのそうした試みを第一歩として、その後、次々に創刊される『小国民』や『少年世界』というような児童雑誌に掲載される西洋童話の翻訳をとおしてその基礎が確立されていく。「王の新しい衣裳」以降の二、三十年間というのは、日本の読者が、そのような翻訳・翻案作品の助けを借りて、欧米児童文学の本質を理解し、やがて独自の児童文学作品を花開かせていくための準備期間と位置づけることができるのである。

われわれは、日本の近代児童文学の歴史に最初の一步を刻むことになったアンデルセンやグリムの翻訳に、さらにはその翻訳誕生の重要なきっかけを作った『ナショナル読本』をはじめとする外来の英語教科書に、これまで以上に大きな関心を寄せてみなければならぬだろう。

(中央大学教授)